

「ビエンナーレの現在」第二週プレレジュメ

第2回発表班：宇山、玉城、並木、水野

今回私たちは『ビエンナーレの現在』の5章「未来のカルトグラフィー」、6章「場の創出」を扱います。5章と6章は、アジア太平洋トリエンナーレ（以下APT）に焦点を当てています。5章では主にAPTの開催によるオーストラリアの戦略を浮き彫りにし、6章では第5回APTで始まったキッズAPTの試みを取り上げ、誰のための国際展か？ということに言及しています。私たちはこれら5章と6章で使用されている様々な観点、視点から現在開催中の横浜トリエンナーレ2008（以下横トリ08）を考察していきます。

下に5章と6章の要約が載せてあります。非常に長いので全てを読む必要ありませんが、読解を進めていく上で、不明な点などありましたらその都度参考にしてみてください。横トリ08のホームページアドレスを載せておきます。総合ディレクターである水沢勉による今回の横トリの全体テーマを必ず読んでください。また、今回の発表でも引き続き「市民参加」に焦点を当てます。前回のゼミでの発表班の主張、議論で話し合われたことをもう一度思い返し、自ら考えてみてください。当日は前回使用した文献、レジュメをそれぞれ持参してください。

—『横浜トリエンナーレ2008』 全体テーマ「タイムクレヴァス」—
<http://yokohamatriennale.jp/2008/ja/outline/>

—要約—

第5章：未来のカルトグラフィー

はじめに

- 「アジア太平洋トリエンナーレ(Asia Pacific Triennial of Contemporary Art)」(以下APT)とは？
オーストラリア、クイーンズランド州ブリスベンのクイーンズランド美術館が開催
参考URL：<http://www.qag.qld.gov.au/apt>

「第一回APT」 1993年 『伝統と変化(tradition and change)』
[http://www.qag.qld.gov.au/apt/apt_1_\(1993\)](http://www.qag.qld.gov.au/apt/apt_1_(1993))

「第二回APT」 1996年 『今日の遭遇(present encounter)』

[http://www.qag.qld.gov.au/apt/apt_2_\(1996\)](http://www.qag.qld.gov.au/apt/apt_2_(1996))

「第三回APT」 1999年 『未来を越えて(beyond the future)』

<http://www.visualarts.qld.gov.au/apt3/>

- ・ 「コンテンポラリー（同時代性）」という概念の捉えなおしを図る
- ・ アジア太平洋地域の芸術文化におけるオーストラリアの未来のイメージ表明
→対話と交流の結節点、水路という位置づけ

● 本章の目的

仮定： 「APT」は、

- ① 地域の対話と交流の条件を定義する特権的なキュレーションの主体として、
- ② アジア太平洋地域の中心として、
オーストラリアを位置づける。

→キュレーション的想像体(アジア太平洋地域という想像体)の基盤を成すカルトグラフィー(地図製作)的配置と表象のロジックを浮かび上がらすことによりこの仮定を批判的に読み解く

1. カルトグラフィー的配置とキュレーション的想像体

● エドワード・サイードの「対位法的(contrapuntal reading)」読解

「対位法的」読解：もともとは音楽用語である「対位法」を文学テキストの読解に借用
→宗主国の文学が帝国主義と植民地主義のプロセスを含んでいることを露にするための批判的読解方法

宗主国の文学は・・・

- ① 宗主国の文学は植民地を専制的に表現する、また特定のイメージを権威づける
- ② 宗主国(中心)から植民地(周縁)を見渡すという支配的/搾取的視線を含んでいる

⇒⇒⇒

- ① 特定の空間や領土が創造され、また専制的に表現される
- ② 自らを中心に位置づけ、周縁を見渡す視点を持つことを可能にする

※ おまけ(すばらしいですよ)

対位法：対位法(たいいほう)(英 *counterpoint*。対旋律を表す語でもある。)とは、[音楽理論](#)のひとつであり、複数の[旋律](#)を、それぞれの独立性を保ちつつ互いによく調和させて重ね合わせる技法である。

<http://jp.youtube.com/watch?v=g7LWANJFHEs&feature=related> (グレン・グールド「バッハ：ゴールドベルグ協

奏曲」)

● アジア太平洋地域におけるキュレーション/アートの基準の生産

①から・・・

「APT」はアジア太平洋という「地理的な概念化」された地域(地図製作された地域)のキュレーション、芸術文化に対し、さまざまな物語、言説、「発露する身振り」を通し基準を作り出し、この地域の芸術作品を位置づけ、秩序化する。

Ex. 「アジア的特性」→アイデンティティ、差異という表現

⇒アジア太平洋地域におけるアートに関する選定と解釈の条件の定義、特定の知識や歴史記述の生産のための条件を作り出した。

● アジア太平洋という地図作成とオーストラリア自らの位置付け

②から・・・

西洋の辺境の地であり、白人殖民国家でもあったという特異なロケーション

→植民地であったことを利用し、その多くが植民地的経験を持つアジア太平洋地域との戦略的同盟

⇒アジア太平洋地域内での西洋(中心)としての自らの位置づけ

2. 同時代性の分裂的なカルトグラフィ

● アジア太平洋地域における「コンテンポラリー(同時代性)」

- ・ 「アジアと太平洋の文化は遠い過去から変化ないか、西洋の宗主国文化の派生物でしかない」という西洋のアジアに対する偏見を払拭することが目標として掲げられている。

→新たなアートの見方を提示するため同時代性に焦点を当てるという方法は以前の美術史の文脈、その地域の歴史などを省みないため、作品の正統的な評価が困難。

⇒⇒⇒

逆に既存の国際的な嗜好や評価基準を踏襲してしまうという可能性がある。(ジレンマ)

※ 既存の国際的な嗜好は、

- ① アジア太平洋地域のある特定の形式と領域の特権化

② 作品を土地のローカルな文脈から切り離す

⇒⇒⇒

キュレーションと実際の作品制作の現場間での分裂

→歴史的に複雑に絡みあった経験を持つ地域でアート作品は作られるのだが、その文脈を無視し「同時代性」のもとキュレーションするために、逆に地域の境界線が浮かび上がる

⇒「変容の中で絡まりあっている差異」ではなく、「無時間的で、固定的な差異」のイメージ

●特権的に「同時代性」を提示する「A P T」という主体

「A P T」はこの地域における「同時代性」を表すものを特権的に提示する

→この地域の「コンテンポラリー(同時代性)アート」の基準を作り出す

3. 差異とアイデンティティのパノラマ的なトポグラフィー

キュレーションという行為そのものが、権力であり、知識の生産であり、特権である。

●中心化された観客性の諸形式

「アジア」、「太平洋」といったカテゴリーは、自分自身を中心に位置づけ、「アジア」、「太平洋」といった実体を命名し、位置づけ、想像している。

① 西洋近代性の特徴である「世界像(1つの像として想像され理解された世界)」

→現代的な「テクネ(techne)」とは、「置くこと」と「据え付けること」である

→対象を空間と場所に位置づけ、秩序化する

② 「命名の権力」

→対象を表象することによって解釈が可能になり、対象が理解可能なものとなる

Ex. 混沌としたものを「命名」することによって、差異が浮かび上がり、異種混合性が明らかになる

→存在する世界を表象することによって世界を像として枠組み化する

①、②から・・・

「APT」は、三回目までのテーマである「時間」とその名称に含まれるような「空間」を表象し組織することで、西洋近代性の特徴である「世界像」的（パノラマ的）にアジア太平洋地域のアートを秩序化していた。

⇒この地域の芸術作品をパノラマ的な枠組みの形成により秩序化することによって、西洋近代的に自らを位置づける。

4. カルトグラフィーの见えない手

①展覧会における開催地の重要性

←文化的・地理的ロケーションが、展覧会の形式や内容、潜在的観客を決定する。

②国際展の名称に含まれるロケーション

←名称のなかに展覧会の開催地の名前が含まれていることは、ここに書き込まれている**権力と特権**の関係を可視化することである。

↓

ここでは、アジア・太平洋地域においてアイデンティティーと差異を表象するための中心化された位置にいるということ。

Ex. ヴェネチア・ビエンナーレ

* 「ヴェネチア」という地から、魅力やロマンを連想する。

アジア太平洋トリエンナーレ（APT）

* 「キュレーション的な主体（オーストラリア）」を除外

→オーストラリアを外部に位置づけ、カルトグラフィー的行為、中心化された権力の行為を隠蔽する…【不在/不可視】

* 「他者たち（アジア太平洋）」を包含

→他者を目に見えるものにし、その存在を強調する…【存在/可視】

「複合的」で「協働的」なキュレーション制という図式を APT のよりどころの要素として提案しつつ、キュレーション上の作業の支配を確保しようとした。

<対話・交流というキュレーションの原理>

5. 「中立的な」開催地

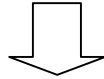
APT が、オーストラリアのブリスベンで開催されたことについて

① 地理的な「中立性」

* ブリスベンは、アジア太平洋地域の先端に位置する。

② 文化的な「中立性」

* シドニー・メルボルンで認められていた「偏向(バイアス)」(ここでは、ヨーロッパ植民地時代の遺産を表す)と比較して、中立的である。



以上のことは、オーストラリアのキュレーションの主体が、いかに中立な進行役、対話と交流のファシリテーターになりえたのかを明らかにしている。

それに加え、単に文化的なだけでなく、より広範なかたちで**経済的・地政学的な変容や再編**が起き、オーストラリアにおける新たなコスモポリタン都市としてブリスベンのイメージを提示することに役立ってきた。

6. (ポスト)コロニカルなカルトグラフィー

クイーンズランド美術館による APT への見解

「準備なく企てられる探検—地図のない旅」

→開放と発見を肯定することがこれまでの欧米のアートや解釈以上に豊かな想像によって生まれる。

…しかし、「地図なしの旅」は有り得るのか？

「主要な中心のヘゲモニーからの決定的な離脱」

「**「中心」のない平等性を基盤にアートを見るための新しい方法を供給している**」

→脱中心化された位置性を生かし、アジア太平洋地域における欧米の媒介を批判したい、というオーストラリアの主張。

この主張は

①. 多極的な世界での文化的中立性

+

②. この地域での植民地主義への軽視、過去ののりこえた歴史という見方によって支えられている。

筆者は、②を、今も継続するヒエラルキーと権力の非対称性を隠蔽しているとして批判。

APT における植民地主義の否認は、その地域における現在も続く植民地の影響だけでなく、

植民地の過程が彼らのアイデンティティーの核心にとって重要なものだったということを覆い隠している。

★欧米世界にみられるような、キュレーションの権威の資格の継承の仕方(先進国が特権を握るという図式)を反省せずに、オーストラリアに資格をあたえてしまっていることを指摘。

おわりに(コーダ)

「アジア太平洋トリエンナーレ 2002」

過去三回のトリエンナーレと異なる記念碑的な正典であった。

- ・ 過去三回のトリエンナーレの展示の秩序を崩壊
- ・ オーストラリアの想像体の観念から、地域に対する関与と概念が消え去りつつあることを表している。

* オーストラリアと植民地的歴史や地理を結び付けてきた道路を避けるための「迂回」として「アジア」を経由し、「対話・交流」よりも「国際的な存在」にいたる道をあゆむことを志向した。

第6章：場の創出

1. 水平的国際主義

他の国々を紹介する際、日本人キュレーターの視線が問題となる

塩田純一：「水平の視線でものを見ていく」ことの必要性

⇒それぞれの国に固有のコンテクストに照らして理解する

様々な国それぞれの社会や文化が自由に呼応し合い、思考と芸術の多種多様なパターンを
取得して国際化していく

2. 地域の観客に向けて

近年国際美術展の現状→「ひたすら巨大に均質に退屈に」

⇨展覧会とはアートに出会い、それを隣に住む人と分かち合いたいと考えるべきもの。

つまりこれからの国際美術展は

『より一層地域の一般の観客のための企画となるべきなのだ』

さらに…複数の国際美術展を掛け持ちする作家が存在 ⇒「均質化」
作家と作品が足りなくなる「需要過多になる傾向」が強まる

3. 参加観客制度

参加観客制度：一般観客の代表がビエンナーレの参加作家とペアを組み、意見交換しながら展覧会の出品作品を構想していくという企画

* 参加観客制度が導入された理由

- ①開催された光州市を「民主の聖地として国内外にアピールするため
- ②前年のヴェネチア・ビエンナーレに対する実践回答

↓

・「観客の専制」という副題が掲げられていたにも関わらず観客が受動的であった

対照的に光州ビエンナーレでは発言の機会が与えられたことに加え、展覧会会場では作品の横に作家とともにキャプションとして明示された。さらに展覧会図録では、見開きレイアウト上、視覚的に参加観客と作家が対等の扱いを受けた。

4. 現実空間に場所を

展覧会や美術館に収蔵されたりするのは、作品や空間や時間を越えてより多くの人々の目にふれられるようにするため⇒「美術作品は多層的な意味を含む」

⇒現実空間に場所が必要

5. GoMA 開館

GoMa=Gallery of Modern Art(現代美術館)、オーストラリアクイーンズランド美術館にある。

- ・この開館に合わせてアジア太平洋トリエンナーレは開幕
- ・GoMA が増築されたことにより、第五回アジア太平洋トリエンナーレは展示空間が従来と比べて約二倍に拡張。

6. APT 5 (第五回アジア太平洋トリエンナーレ)

第一回展から脱欧米中心主義を表明してきた APT は、今回もさまざまなアーティストによる作品で独特な存在感を示した。

7. APT シネマ

=オーストラリアン・シネマテーク

⇒APT5の主要展示に加えて、GoMA内に開設されたAPTの関連企画の一つ

目的：映画や美術作品を紹介する上映プログラム、展示会の企画

狙い：アジア太平洋地域における映画表現の多様性を紹介すること

・紹介された7人の監督の作品が長期間日替わりで上映される

⇒限られた日数しか滞在しない旅行者は見るできない

⇒これらの映画プログラムは第一義的に地元の観客向けのサービス

8. キッズ APT

≠APT5シネマ

対象：3歳から12歳の子供

内容：ワークショップ形式

結果：幅広い年齢の子供が対象⇒複数の段階を設定してより決め細やかな対応ができた

段階的に子供たちを導いていく仕組み ⇒ キッズ APT は優れた教育プログラム

9. ボーダーレス

●男性中心主義、白人中心主義、国別参加主義、巨匠主義から「ボーダーレスの思想」へ

・ドクメンタの試み

→女性・第三世界出身者の芸術監督の登場、若手作家の起用、国家の枠組みの紹介

・ハラルド・ゼーマンの試み

→「人類」と括ることであらゆる枠組みを乗り越えるだけでなく、「グローバリゼーション」という言葉が持つ地理的な意識と決別した地平へ

●ボーダーレスの思想と〈帝国〉との相似

・「たえず拡大し続ける開かれた境界の内部にグローバルな領域を漸進的に組み込む」

→脱中心性、異種混合性といったキーワード、絶えず世界を「包摂」し続ける

10. 大衆主義

●国際美術展の肥大化と陳腐化

参加国の増加

↓

展示会場の増設

↓

入場者を増やさなければならない

↓↓↓

最大多数のために読解が容易な作品を展示すべきなのか？

●美術の「質」とは？

- ・あらゆる人に快適で理解可能な作品は陳腐か？
 - ・シリアスで読解が困難な作品は「質」が高いのか？
- ⇒美術における民主主義とは？

11. 関係性の美術

●美術の質は誰が決めるのか

①第五回光州ビエンナーレにおける観客参加制度

→後期資本主義社会において購買層つまり、大衆が資本主義社会において重要な要因である

②「関係性の美術のかたち」

→キュレーター、作家、観客たちとの関係性のなかで作品は生成し、完成すべき

⇒美術の「質」は「関係性」の中に求められることが必要

12. マイノリティ・エンパワーメント

- ・少数派への特別扱いは必要か？（少数派→子供、親子連れ、その他）
- 展覧会場は基本的に大人（マジョリティ）のための空間であるから、少数派（マイノリティ）への配慮が必要

14. 国際・美術・展

- ・国際美術展開催の国家的思惑
- 国際展開催は、国際性や、文化度の高さの対外、国内へのアピール

これから国際美術展に求められていくこと

- ・アイデアをさらに共有していくこと
- ・機会と参加する場を与えること
- ・国際美術展は無料化